

昭和二十一年

消毒の噴霧虹なす薄暮光

くろの葱皆花咲きて四月盡

暮遅し夕餉待つ間の農日記

大根の花の小乱れ日照雨過ぐ

苺太る五月の土を耕せり

甘藷苗剪る露にまみれて朝曇り

山羊の乳房のゆたかに新樹光充つ

蔓豆に手をやる雨後の夕明り

のぼりつめ穂麦は風ある天道虫

春雨や子にせがまれて面つくり

地靄こめ苺は花を開きそむ

泰元は寝起きの良い子

寝起きよき子に大輪のぼたんかな

飼屋の灯洩れて庭木の緑濃き

齊れの穂麦の風に耕せり

麦の穂に西日さやけき天道虫

新府祭 雄雛を売る店

桐咲いて春迅ハヤくすぐ兵の墓地

雛店に人立つ春の祭りかな

草箆のふれて散りけり桑の花

あかつきの地靄に濡るる青苺

濡れもどる五月の雨や昼湯焚く

泰元、五味千代造翁より螢を貰う
初螢子は大切にのぞきいる

刈り草のこぼれ流るる野川かな

麦秋や提灯に似し月上がる

草を刈るさき濁る雨後の小川べり

秋涼の小雨に濡れつつ苺うえ

耕すや花桐甘き香をおくる

桑あげてひたる後湯や夜の秋

桑の実に染まりし舌をみせ合いぬ

帰農して木犀の香に秋蚕飼う

ほのぼのと裸身ぬくとく秋耕す

秋耕やわがなりはいの影法師

通草蔓湖に展ける岨路かな

秋耕や昼の茶が沸く野良かまど

味噌を炊く大土間暮るる竈火かな

暗い中に起き出して西山へ栗拾い

有明の月光を踏む栗拾い

下道、元岡君令弟遺骨還る二句

葬家訪う新下駄ぬるる露の道

短日の葬家の膳に坐りけり

時雨すぐる山畑の麦蒔き急ぐ

冬木立野の寂光に耕せり